

小早川 義貴 さん (国立病院機構 災害医療センター 福島復興支援室)

Q : 現在の活動は？ **A : 医療機関外で行動する医師**
浜通り中心に、行政や保健・医療の現場で困りごとの解決をサポートしています。例えば、保健師による対応困難事例に同行したり、役場の産業医をしたり、県外の研修医や学生を浜通りへ連れて行ったり、と何でも屋です。たまに救急医としてドクターヘリに乗ることもあります。DMAT (災害派遣医療チーム) 事務局にも所属していて、新たな災害の発生時には、県外へ出動もします。



「最近、ドラマの影響からかドクターヘリにはイケメン医師だけが乗っているという誤解があります。」とユーモアあふれる小早川さん



福島駅西口近くにある「福島復興支援室」で地域研修に来た研修医の中務さんと2ショット

Q : 活動のきっかけは？ **A : 自分にもできると気づいたから**
震災前は島根で救急医として働いていました。震災の夏に、災害医療センターに異動し、福島で住民の一時帰宅に関わりました。その後「避難者の健康相談に応じてほしい」と依頼があり、放射線に関する不安にどこまで救急医が対応できるか未知数でしたが、放射線以外の相談も非常に多く、放射線の専門家ではない自分にも支援ができると気づきました。2014年に[福島復興支援室](#)が開設され、活動が本格化しました。

地域の自立を促す支援、「道聞かれ顔」の大切さ

Q：活動で思うことは？ A：ごまかしは通用しない

救急現場は一期一会ですが、発災から時間が経過した被災地での活動だと、人間関係がより深く長くなるため、その場限りの口上手さや医師の「威厳」などはあまり通用しません。

支援による行く末を想像した上で、必要な支援は何かを考えています。災害支援では時に支援者の自己満足に陥ることがありますが、そうならないよう、地域の自立を妨げないよう、気をつけています。



活動のきっかけとなった「よろず健康相談所」
「いろいろな相談の窓口」という意味が込められている

福島復興支援室について

福島復興支援室は、福島県の医療支援を強化する目的で、2014年に災害医療センターによって福島市に開設されました。

所在地：福島市太田町8-15 recビル2階
電話番号：024-531-6370

復興庁は、福島県の地域医療再生基金を通じて活動経費の一部を補助しています。

Q：今後の展開は？ A：福島に軸足を置いて他地域にも貢献

最近、ある記事で「道聞かれ顔」の大切さを知りました。相談されやすい雰囲気にしておくと、自然と会話が生まれるという内容です。

福島の実験は次の被災地でも役立ちます。例えば、熊本地震では現場職員の健康管理に福島で得た知見が活かされました。一方で、福島にはまだまだ気づけていない支援ニーズが眠っているはず。もうしばらく「道聞かれ顔」で福島に暮らし、地域で活動をしていくつもりです。